

# 背景

当社は介護施設において入居者に対し訪問薬剤管理指導を行っている。入居者の多くは疾病の治療を受けているため、入居時に服用中の薬を持参する(以下「持参薬」と呼ぶ)ことから、持参薬を適正に管理しないと重複投与や相互作用といった様々なリスクが発生する。そのため、薬剤師が持参薬の管理を担うことで持参薬に関わるリスクを防いでいく必要がある。



# 目的

- 持参薬に関連する問題点の把握
- リスク事例の抽出
- リスク回避方法の調査

# 方法

## リスク事例調査方法

介護施設において訪問薬剤管理指導業務の担当薬剤師（9施設、7名）を対象にアンケートおよびヒアリングを行い、持参薬に起因するリスク事例と対応方法を調査した。

## アンケートおよびヒアリングによる調査項目

- ・持参薬の問題点と対応方法
- ・持参薬管理によるリスク回避事例

# 持参薬の問題点

- 次回往診時までの薬の不足
- コンプライアンス不良による余剰の薬
- 持参した薬剤情報提供書と薬の内容の相違
- 現在は改善している症状に対する漫然とした薬の処方
- 処方後長期間が経過し使用期限や保管状況の不明確な薬の持参
- 処方意図の不明な薬の存在
- OTC 医薬品やサプリメントの併用
- 多科受診による処方薬の重複

# リスク事例①

～コンプライアンス不良～

入居前のコンプライアンスが悪いため持参薬の残量にバラつきがある。薬を飲まないことによる症状の悪化および余剰の薬を誤飲するリスクが発生。

## 対応方法

持参薬の内容を薬剤師が確認



余剰分の整理と一包化による区分け



コンプライアンスを改善



コンプライアンス不良のリスクを回避



# リスク事例②

～不必要な薬の処方～

花粉症状、感冒症状発現時および外傷時などに処方された薬が症状改善後も継続して処方。不必要な薬が漫然と処方されることで副作用発現の可能性が上昇。

## 対応方法

服薬指導時において症状と薬の  
コンプライアンスを確認



往診への立会い



カンファレンスにて医師と情報交換



処方の適正化を図る



不必要な薬の処方によるリスクを回避



# リスク事例③

～薬学的判断が必要な処方～

食道アカラシアの患者に対し、硝酸イソソルビド錠5mgを食道拡張の目的で食前に処方されていたが、施設スタッフがカセッターへのセットを食後と間違えたことにより、薬効が十分に得られないリスクが発生。

## 対応方法

施設オープン前に施設スタッフに対して持参薬管理に関する説明会を実施



処方内容の薬学的判断



服用目的を施設スタッフや患者に伝え、用法を指導し、カセッター内を修正



薬学的判断が必要な処方におけるリスクを回避



# リスク事例④

～規格が異なる薬品の誤飲～

薬をヒートから出して保管している患者が規格変更前後の薬を混在させて保管。患者や施設スタッフには区別が出来ずに誤飲するリスクが発生。

## 対応方法

薬剤情報提供書、お薬手帳から現在服用中の薬を把握



持参薬の内容を確認後、変更前の薬を整理して服用する薬を一包化



医師に現在服用すべき正しい規格について報告



規格違いによる誤飲のリスクを回避



# 考察

- 薬の管理には薬学的な知識が必要であり、複数の疾患を治療している高齢者においては特に注意が必要となる。そのため、介護施設において持参薬のリスクを回避するためには薬剤師による管理が不可欠である
- 介護施設入居時においては持参薬による様々な問題があるものの、その時点で薬剤師が改善に関わることで入居者に生じるリスクを回避することが可能である

# 結論

